

中国語とタイ語の動詞連続構文における文法範疇*1

中タイ両言語には方向範疇があるのか

沈 力

0. はじめに

文は語彙的な部分と機能的な部分によって組み立てられている。語彙的な部分は基本的に動詞句、名詞句の主要部を担うようなものであるが、機能的な部分は基本的に文法範疇を担うようなものである。言語のタイプはたいてい機能的な部分の性質の違いによって見分けられる。形態的特徴の複雑な、膠着的・屈折的な言語では、機能的な部分が接辞によって担われるが、形態的特徴の簡単な孤立的言語では、機能的な部分も語（特に動詞）によって担われる。この観点から見れば、孤立的な言語では機能的な部分を担う動詞句と語彙的な部分を担う動詞句の連続が膠着・屈折的な言語より顕著であるということは容易に想像できる。ここで、動詞（句）と動詞（句）の連続のことを動詞連続構文（Serial Verb Construction）と呼ぶ。

孤立的な言語では、どんな文法範疇が動詞連続によって示されるのか。これは従来、多くの研究者が注目している問題の1つである。この論文では、中国語とタイ語を例にして、少なくとも依存関係の点で条件、様態、帰結、達成という4つの文法範疇が動詞連続によって、システムチックに示されていることを提案する。最後に、従来の研究で記述されている方向範疇が中国語とタイ語にはないことを明らかにしたい。

1. 1つの興味深い現象

中国語の移動動詞には qù（行く）と lái（来る）がある。qù と lái はまたほかの移動動詞に後続して移動の方向を示すことがあるから、ここでそれを

方向動詞と呼ぼう。次の(1a)と(1b)は、方向動詞が移動の主体(theme)を主語としてとる移動動詞(以下Vaと略す)に後続する例である。

(1) Va: a. Tā huí xuéxiào.

彼 戻る 学校

彼は学校に戻る。

b. Tā huí xuéxiào qù le.

彼 戻る 学校 行く 助詞

彼は学校へ戻っていった。

c. *Tā huí qù xuéxiào le.

彼 戻る 行く 学校 助詞

同上。

(1a)に示しているように、huí(戻る)はVaで、主語NPはhuíの主体である。方向動詞qù(行く)はhuíに後続して「戻る」の(話者から遠ざかる)方向を示すが、問題は、方向動詞はVaのあとのどの位置に来るかである。(1b)が文法的であるが(1c)が非文法的であることから、先行動詞がVaである場合、方向動詞は「Va+NP+方向動詞」のように分布するが、「Va+方向動詞+NP」のように分布できないことがわかる。

中国語にはさらに移動の主体を目的語としてとる移動動詞(以下Vbと略す)がある。方向動詞はVbに後続する場合、Vaの場合と異なる振る舞いをする。

(2) Vb: a. Tā jì - le yìfēng xìn.

彼 送る 完了 一通 手紙

彼は一通の手紙を送った。

b. Tā jì - le yìfēng xìn lái.

彼 送る 完了 一通 手紙 来る

彼は一通の手紙を送ってきた。

c. Tā jì lái - le yìfēng xìn.

彼 送る 来る 完了 一通 手紙

彼は一通の手紙を送ってきた。

(2a)に示しているように、jì(送る)はVbであり、目的語NP(yìfēng xìn)

は *ji* の主体である。(2b) と (2c) を比べれば分かるように、先行動詞が *Vb* である場合、方向動詞は「*Vb* + *NP* + 方向動詞」のように分布しても「*Vb* + 方向動詞 + *NP*」のように分布しても可能であるということである。

さて、タイ語の例を見てみよう。タイ語にも中国語と同じような方向動詞 *pay* (行く) と *maa* (来る) があり、移動動詞も *Va* タイプと *Vb* タイプに分かれている。ただし、タイ語の方向動詞の分布は中国語と異なる様子を現している。まず (3) を見られたい。

(3) *Va*: a. *kháw klàp roonrian*

彼 戻る 学校

彼は学校に戻る。

b. *kháw klàp roonrian pay.*

彼 戻る 学校 行く

彼は学校へ戻っていった。

c. *kháw klàp pay roonrian.*

彼 戻る 行く 学校

同上。

(3b) と (3c) を比べればわかるように、先行動詞が *Va* である場合、タイ語の方向動詞 (*pay*) は *Va* + *NP* にも *Va* の直後にも後続することができる。ところが、先行動詞が *Vb* である場合、状況は一変する。(4) を見られたい。

(4) *Vb*: a. *kháw sòn còtmăay*

彼 送る 手紙

彼は手紙を送る。

b. *kháw sòn còtmăay maa.*

彼 送る 手紙 来る

彼が手紙を送ってきた。

c.**kháw sòn maa còtmăay.*

彼 送る 来る 手紙

同上。

(4a) では、*sòn* は *Vb* であり、*còtmăay* (目的語 *NP*) は *Vb* の主体である。

(4b) と (4c) の文法上の対立から、タイ語の移動動詞は *Vb* + *NP* に後続す

るが、Vb の直後には後続できないということが伺える。

中国語の方向動詞の分布とタイ語の方向動詞の分布を照らしてみると、1 つの非常に興味深い現象があることに気づく。すなわち、方向動詞が移動動詞の直後に後続する場合、タイ語と中国語の文法性は正反対であるということである。具体的な問題点を (5) にまとめる。

- (5) a. 中国語の方向動詞は (1c) のように Va の直後に後続することができないのに対して、タイ語の方向動詞は (3c) のように Va の直後に後続できるのはなぜか。
- b. タイ語の方向動詞は (4c) のように Vb の直後に後続することができないのに対して、中国語の方向動詞は (2c) のように Vb の直後に後続できるのはなぜか。

本論文では、中国語とタイ語の動詞連続構文では、依存関係を示す各種の文法範疇が体系的であることを考察するうえで、方向動詞は帰結範疇としても達成範疇としても振る舞うことができるが、独自の方向範疇をなしていないことを議論する。最後に、この結論に基づいて中国語とタイ語の (5) の対立は両言語の文法範疇の特徴の違いから生じた必然的な現象にすぎないと説明できる。

2. 動詞連続構文における依存要素とコア要素

動詞連続構文をできるだけ集めて観察してみると、そこには常に「事象を示す要素」と「事象が発生する環境」たとえば「時間・場所・手段・様態・結果」などを示す要素があることがわかる。後者は常に前者に依存して生起するが、前者は後者に依存しない。以下、前者をコア要素 (Core Element) と呼び、後者を依存要素 (Dependent Element) と呼ぶ。この節では、動詞連続構文における CE と DE はどのように区別しているのかを観察したい*2。

まず最初に、CE と DE は語順という観点から区別できないということに注意していただきたい。すなわち DE は CE に先行することも後続することも可能であるということである。(6a) と (6b) を比べてみよう。

- (6) a. Wǒ gěi tā xiě xìn.

私 あげる 彼 書く 手紙

僕は彼に手紙を書く。

b. Wǒ xiě xìn gěi tā.

私 書く 手紙あげる 彼

同上。

(6a) と (6b) ではそれぞれ xiě xìn (手紙を書く) は CE で、gěi tā (彼に) は手紙を書く相手を示す DE である。しかし、gěi tā は (6a) では CE の前、(6b) では CE の後に来ている。(6a) の gěi tā も (6b) の gěi tā も DE であるという点から見れば、DE の位置は CE に対して自由であると言える。では、DE は統語的に CE とどのように区別するのだろうか。

中国語には、アスペクトマーカ―が CE 動詞に後続することができるが、DE 動詞には後続できないという現象が見られる。中国語には le, zhe, guo というアスペクトマーカ―がある。それらは動詞に後続し、それぞれ完了、進行、経験を示す。(7) を見られたい。

(7) a. Wǒ chī - le yíge píngguǒ.

私 食べる 完了 1つ りんご

私は1つのリンゴを食べた。

b. Wǒ chī - zhe yíge píngguǒ.

私 食べる 進行 1つ りんご

私は1つのリンゴを食べている。

c. Wǒ chī - guo nèizhǒng píngguǒ.

私 食べる 経験 その 種類 りんご

私はその種類のリンゴを食べたことがある。

動詞連続構文は基本的に1つの(複雑な)事象を表すものなので、その事象のアスペクトを表すマーカ―は当然ながら一回しか現れないと考えられる。では、そのアスペクトマーカ―は CE 動詞と DE 動詞のどちらの後に現れるのか、それともどちらの後にも気まぐれに現れるのか。以下の例に示されるように、アスペクトマーカ―は事象の核である CE 動詞の後にしか現れないということがわかる。

(8) a. Wǒ gěi tā xiě - le yìfēng xìn.

私あげる 彼 書く 完了 一通 手紙

僕は彼に手紙を書いた。

b.*Wǒ gěi - le tā xiě yìfēng xìn.

私 あげる 完了 彼 書く 一通 手紙

同上。

gěi (あげる) は明らかに動詞である。ところが、(8) の動詞連続構文において le が gěi に後続することはできない。これは gěi が最初の動詞の位置に来ているからではない。なぜなら、gěi tā は次の(9) のように CE の後に来ているにもかかわらず、le が後続することができないからである。

(9) a. Wǒ xiě - le yìfēng xìn gěi tā.

私 書く 完了 一通 手紙 あげる 彼

僕は彼に手紙を書いた。

b.*Wǒ xiě yìfēng xìn gěi - le tā.

私 書く 一通 手紙 あげる 完了 彼

同上。

(8) と (9) の gěi の共通点は、両方とも DE であるということである。すなわち動詞連続構文でアスペクトマーカが DE として働く動詞に後続することができないと言える。この観察に基づいて考えれば次の現象も予測できる。すなわち同じ動詞連続構文でも gěi が CE であれば、アスペクトマーカが後続することができるということである。(10) を見られたい。

(10) Wǒ qù tājiā gěi - le tā yíjiàn lǐwù.

私 行く 彼の家 あげる 完了 彼 1つ プレゼント

僕は彼の家に行って彼にプレゼントを1つあげた。

(10) が文法的であることはうえの予測が正しいことを示している。

以上の現象から見れば、アスペクトマーカが DE 動詞の後に生起できないと考えられる。アスペクトの生起という観点から、中国語の動詞連続構文では DE と CE が統語構造において異なる機能を果たしていると言える。

3. 依存要素の範疇化

ここでは、ある特殊な機能的意味を持っている独特の形式を文法範疇と呼ぼう。この節では、まず、中国語とタイ語の DE は範疇化して、その範疇化には CE の示す事象が起こったあとの結果を示す結果範疇と、CE の示す事

象が起こる状況を示す状況範疇があることを明らかにしたい。さらに、中国語では、結果範疇は帰結と達成、状況範疇は条件と様態、それぞれ2つの下位範疇に分けられるのに対して、タイ語では、結果範疇は帰結と達成に分けられるが、状況範疇は細分化していないことを観察する。

3-1. 結果範疇と状況範疇

2-1節で見たように、DE の分布は必ずしも均一ではない。中国語の動詞連続構文には CE に後続する DE と、CE に先行する DE がある。さらに観察してみると、CE に後続する DE は CE の示す事象の結果を示し、CE に先行する DE は CE の示す事象の状況を示すことがわかる。つぎの例を見られたい。

(11) a. Tā hē zuì jiǔ le.

彼 飲む 酔う 酒 助詞

彼はお酒を飲んで酔っぱらった。

b.*Tā zuì hē jiǔ le.

同上。

(12) a. Xiǎomíng jí - zhe huí jiā.

人名 急ぐ 様態マーカー 帰る 家

小明は急いでうちへ帰る。

b.*Xiǎomíng huí jiā jí-zhe.

同上。

(11a) の hē の後に来る zuì は飲んだあと酔うという結果になっていることを示し、同じ意味を示すのに (11b) のように zuì hē という語順にはならない。それに対して、(12a) の huí の前に来る jí-zhe は帰るという事象が起こる時の状況を示し、同じ意味を示すのに (12b) のように huí jiā jí-zhe の語順は成り立たない。

タイ語にも中国語と同じ現象が見られる。次の例を見られたい。

(13) a. kháw phlák dèk lóm

彼 押す 子供 倒れる

彼は子供を押して、子供が倒れる。

b. *dèk lóm kháw phlák.

同上。

(14) a. kháw 'aèɛp kin khanǝm

彼 隠れる 食べる お菓子

彼はこそこそお菓子を食べる。

b. *kháw kin khanǝm 'aèɛp.

同上。

(13a) と (13b) また (14a) と (14b) を比べれば分かるように、CE 動詞 (phlák) の結果を示す lómは、phlák dèk の後に来なければならないのに対して、CE 動詞 (kin) の状況を示す 'aèɛp は kin khanǝm の前に来なければならない。

周知のように、修飾関係において中国語とタイ語は正反対である。中国語では修飾語は被修飾語に先行しなければならないのに対して、タイ語では修飾語は被修飾語に後続しなければならない。ところが、動詞連続構文の DE の分布に関しては両言語の語順は同じである。この現象については、Tai (1985)、Carlson (1991: 218)、Lord (1993: 244) の時間的連続 (temporal sequence) という説に基づいて説明することができる。すなわち、動詞連続構文において2つ以上の動詞は事象の時間的発生順に従って並べられる。この発想によれば、DE は、CE の示す事象が発生したあとの状況を示す場合、CE に後続するが、そうではない場合、CE に先行しなければならないと考えられる。これは動詞連続構文のアイコン性 (iconicity) を示す現象である。

この説明が妥当であることはタイ語で裏付けられている。たとえば、完了を示す "léw" は CE と結果 DE の間には挿入されう。

(15) a. kháw kin lâw maw

彼 飲む 酒 酔う

彼は酒を飲んで酔う。

b. kháw kin lâw léw maw

彼 飲む 酒 完了 酔う

彼は酒を飲んだあと酔う。

(15a) は典型的な結果構文である。(15b) も文法的であることから、(15a)

の kin lâw と maw の間に léew が挿入されうることが伺える。ところが、「CE + 結果 DE」と違って、「状況 DE と CE」の間には "léew" が挿入されえない。次の (16) を見られたい。

(16) a. kháw ʔaèp kin khanǒm

彼 隠れる 食べる お菓子

彼はこそこそお菓子を食べる。

b. *kháw ʔaèp lèew kin khanǒm

彼 隠れる 完了 食べる お菓子

同上。

(16b) に示しているように、ʔaèp と kin khanǒm の間に léew を挿入することができない。なぜなら、状況 DE が CE の示す事象と同時進行の状況を示すからである*³。

以上の事実から、中国語でもタイ語でも DE は文法機能の観点から結果範疇と状況範疇に分裂していると言える。

3-2. 結果範疇の下位範疇

状況範疇と同じように、結果範疇にはさらに2つの下位範疇がある。1つは帰結範疇、もう1つは達成範疇である。前者は CE が示す事象が発生したあと、その事象に関わる主体 (theme) がどのような帰結になったのかを示す範疇である。後者は CE が示す事象が発生したあと、その事象自体がどのような状態になったのかを示す範疇である。

3-2-1. 中国語の場合

中国語では、帰結範疇と達成範疇はともに CE の結果を表し、CE に後続するものの、両者は統語的に異なる振る舞いをしている。まず、両者の語順が異なる。帰結範疇の DE は CE 動詞 + NP に後続するが、達成範疇の DE は CE 動詞の直後に後続する。まず (17) を見られたい。

(17) a. Tā mǎi-le yìběn shū kàn.

彼 買う 完了 一冊 本 看

彼は一冊の本を買って読む。

b. Tā mǎi - le yìběn shū gěi wǒ.

彼 買う 完了 一冊 本 あげる 私

彼は一冊の本を買って僕にくれる。

(17) の2つの文では、DE の kàn、gěi wǒ はともに CE 動詞 + NP に後続し、事象が発生したあと CE 動詞の目的語 NP の指示物がどのように扱われるのかを示している。(17a) の kàn は買われたあと yìběn shū がどのように処置されるかを示し、(17b) の gěi wǒ は買われたあと yìběn shū が誰に贈与されるのかを示していると理解できる。

(18) a. Tā hē zuì jiǔ le.

かれ 飲む 酔う 酒 助詞

彼はお酒を飲んで酔っぱらった。

b. Tā mà kū - le Lǐsì.

彼 罵る 泣く 完了 人名

彼は李四を罵って李四が泣いた。

(18) の2つの文では、DE の zuì、kū はともに CE 動詞の直後に後続し、事象発生後、事象がどの程度になっているのかを示している。(18a) の zuì は彼が飲んだあと酔っ払う程度になっていることを示し、(18b) の kū は動作者 NP が李四を罵ったあと、李四が泣くまでの程度に達していることを示していると解釈できる。(17) の帰結 DE と(18) の達成 DE を比べればわかるように、主体 NP の帰結を示す帰結 DE は CE 動詞 + NP の後に来るが、行為の達成・状態の変化を示す達成 DE は CE 動詞の直後に後続すると言える。

2 番目の特徴は、達成 DE は変化性 (change of state) を持つ動詞でなければならないのに対して、帰結 DE は活動性 (active) を持たなければならないということである*4。

(19) a. xué fán le

学ぶ いや 完了

学んでいやになった。

b.*xué nào le

学ぶ 騒ぐ 完了

学んで騒いだ。

中国語の状態動詞のほとんどは状態変化の性質を併せ持っている。(19a)の fán はその 1 例である。(19a) の変化動詞 fán は達成範疇として CE 動詞 (xué) の直後に來ることができ、(19b) の nàò は典型的な活動動詞なので CE 動詞の直後に來ることはできない。それに対し、帰結範疇を担うことができる動詞は活動動詞であって変化動詞ではない。(20) を見られたい。

(20) a Wǒ dào jiǔ hē.

私 注ぐ 酒 飲む

僕は酒を注いで飲む。

b.*Wǒ dào jiǔ sā.

私 注ぐ 酒 こぼれる

僕は酒を注いで酒がこぼれる。

(20a) の hē は活動動詞であるため、帰結範疇として CE 動詞 + NP に後続することができる。一方、(20b) の sā は変化動詞であるため、帰結範疇として CE 動詞 + NP に後続することはできない。

最後に、帰結 DE と CE 動詞の目的語 NP の間に共起制限があるが、達成 DE と CE 動詞の目的語 NP の間に共起制限がないということである。次の例に示すように、帰結 DE は主体目的語に後続するが、目標 (Goal) 目的語には後続できない。

(21) a. Tā zhǎo - le yìjiā lǚguǎn zhù.

彼 探す 完了 一軒 旅館 泊まる

彼は旅館を見つけて泊まった。

b.*Tā jìn - le nàijiā lǚguǎn zhù.

彼 入る 完了 あの 旅館 泊まる

彼はあの旅館に入って泊まった。

(21a) の zhǎo (探す) は主体項 (lǚguǎn) を目的語としてとる動詞であるが、(21b) の jìn (入る) は目標項 (lǚguǎn) を目的語としてとる動詞である。結果的に見れば、帰結 DE の zhù (泊まる) が主体目的語の後に後続する文だけが文法的である。一方、達成 DE は主体目的語の後も目標目的語の後も後続することができる。たとえば dào (着く) はその 1 例である。

(22) a. Tā zhǎo - dào - le yìjiā lǚguǎn.

彼 探す 着く 完了 一軒 旅館

彼は一軒の旅館を見つけた。

b. Tā huí - dào - le nàijiā lǚguǎn.

彼 戻る 着く 完了 あの 旅館

彼はあの旅館に戻れた。

(21) と同じように、(22a) の lǚguǎn は主体目的語であるが、(22b) の lǚguǎn は目標目的語である。それにもかかわらず、dào は達成 DE として CE 動詞に後続することができる。dào は(22a)では「目に入る」という意味を添加し、(22b)では「着く」という意味を添加している。この事実から、達成DEの生起と先行目的語の意味役割との間に共起制限がないと言えよう。

3-2-2. タイ語の場合

タイ語にも中国語と同じような帰結範疇の DE と達成範疇の DE があるが、タイ語のこれら二種類の DE の生起する位置は同じである。すなわち両方とも CE 動詞の直後ではなく CE 動詞 + NP の後に後続しなければならないということである。

(23) a. kháw pĭŋ plaa kin.

彼 焼く 魚 食べる

彼は魚を焼いて(魚を)食べる。

b. kháw phlāk dèk lóm

彼 押す 子供 倒れる

彼は子供を押して、子供が倒れる。

(23b) の lóm は押したあとの達成度を示しているにもかかわらず、(23a) の帰結を示す kin と同じ位置に分布している。

しかし、タイ語の帰結範疇と達成範疇もつぎの2つの点では異なる。まず、帰結範疇を担う DE 動詞が活動性を持つ動詞でなければならないのに対し、達成範疇を担う DE 動詞は変化性を持つ動詞でなければならないという違いが見られる。

(24) a. kháw thúp pra'tuu phaŋ

彼 叩く ドア 壊れる

彼はドアを叩いてドアが壊れる。

b. *kháw thúp pra'tuu tii

彼 叩く ドア 打つ

彼はドアを叩いてドアを打つ。

(24a) が文法的であるが、(24b) は非文法的である。その理由は前者の達成 DE が変化動詞であるが、後者の達成 DE が変化動詞ではないからである。さらに、

(25) a. kháw píŋ plaa kin.

彼 焼く 魚 食べる

彼は卑を焼いて魚を食べる。

b. kháw píŋ plaa may

彼 焼く 魚 焦げる

彼は魚を焼いて魚が焦げる。

(25a) と (25b) はともに文法的であるが、活動動詞 kin は帰結 DE として振る舞い、変化動詞 may は達成 DE として振舞っていると考えられる。

2 つ目に、タイ語の否定辞 mây は達成範疇の DE の前に生起できるが、帰結範疇の DE の前に生起できないということである。否定辞の挿入はある事象が起こったが、予想した結果が得られなかったという意味を示す。以下の (26) は Tasanee (1998) で挙げられた例である*⁵。

(26) a. kháw phlák dèk mây lóm

彼 押す 子供 NEG 倒れる

彼は子供を押しても、子供が倒れない。

b. *kháw píŋ plaa mây kin.

彼 焼く 魚 NEG 食べる

彼は魚を焼いても食べない。

以上見てきたように、中国語の結果範疇もタイ語の結果範疇もそれぞれ帰結範疇と達成範疇に下位分類していることが観察される。

3-3. 状況範疇の2つの下位範疇

結果範疇と同じように、状況範疇にも2つの下位範疇がある。1つは様態範疇、もう1つは条件範疇である。前者はCEが示す事象がどんなありさま、どんな状態で行われるのかを示す範疇であり、後者はCEの示す事象がどんな条件で起こるのかを示す範疇である。

3-3-1. 中国語の場合

様態範疇と条件範疇はともに事象が起こる状況を示し、CEに先行するものの、意味的にも統語的にも異なっている。意味的には、様態範疇はCEの示す事象のありさまを示すのに働き、条件範疇はCEの示す事象の条件を示すのに働くことと規定することができる。中国語では、様態DEには様態マーカ―“-zhe”が後続しなければならないのに対して、条件DEにはそれが後続しないということが挙げられる。つぎの例を見られたい。

(27) a. Xiǎomíng hóng - zhe liǎn shuō...

人名 赤くする 様態マーカ― 顔 言う

小明は顔を赤くして「...」と言った。

b. Tā yòng kuàizi chī fàn.

彼 用いる 箸 食べる ご飯

かれはお箸でご飯を食べる。

(27a)のhóng-zhe liǎnはCEのありさまを示し、(27b)のyòng kuàiziはCEの道具を示している。アスペクトの観点から見れば、中国語の動詞には持続性を持つものと持続性を持たないものがある。様態範疇には持続性動詞が要求されるが、条件範疇には非持続性動詞が要求される。中国語の場合、持続性動詞にはたとえば、pǎo (走る)、tiào (跳ぶ)、zhàn (立つ)、zuò (坐る)、ná (手にもつ)などがあるが、非持続性動詞にはたとえば zài (ある)、huí (戻る)、yǒu (ある)、qù (行く)、lái (来る)などのようなものがある。hóng も典型的な持続性動詞であり、yòng も典型的な非持続性動詞である。したがって、(27a)のhóngに後続する様態マーカ―を取れば、あるいは(27b)のyòngに様態マーカ―をつければ、(27)の2つの文はつぎの(28)のように非文法的である。

(28) a. *Xiǎomíng hóng- liǎn shuō...

人名 赤くする 顔 言う

小明は顔を赤くして「...」と言った。

b. *Tā yòng-zhe kuàizi chī fàn.

彼 用いる 様態マーカー 箸 食べる ご飯

彼はお箸でご飯を食べる。

もちろん、持続性と非持続性を併せ持つ動詞もある。そのような動詞は様態範疇としても条件範疇としても振舞うことができる。つぎの(29)のdàiがその1例である。

(29) a. Tā dài-zhe háizi shàng bān.

彼 つれる 様態マーカー こども 行く 仕事

彼は子供をつれて仕事に行く。

b. Tā dài háizi shàng bān.

同上。

(29a)はdài-zhe háiziはshàng bānのありさまを示し、(29b)のdài háiziはshàng bānの共同者を示している。

様態範疇と条件範疇が異なるもう1つの特徴は、条件DEが2項動詞でなければならないのに対し、様態DEは1項動詞でも2項動詞でもよいということである。

(30) a. Xiǎomíng jí-zhe huí jiā.

人名 急ぐ 様態マーカー 帰る 家

小明は急いでうちへ帰る。

b. Tā ná-zhe gēcí chàng gē-r.

彼 持つ 様態マーカー 歌詞 歌う 歌 affix

彼は歌詞を持って歌を歌う。

(31) a. Tā zǒu xiǎolù qù xuéxiào.

彼 歩く 小道 行く 学校

彼は小道を歩いて学校に行く。

b. *Tā zǒu qù xuéxiào.

彼 歩く 行く 学校

彼は歩いて学校に行く。

(30a) と (30b) を比べればわかるように、1 項動詞の jí でも 2 項動詞の nà でも様態マーカー -zhe を後続して様態 DE として振る舞っているのに対して、(31) の zǒu は 1 項動詞の性質も 2 項動詞の性質を併せ持っているにもかかわらず、2 項動詞の zǒu だけが (31a) のように条件 DE として振る舞うことができる。

うえの 2 つの特徴から、中国語の状況範疇は様態と条件という 2 つの下位範疇に分類できると言えよう。

3-3-2. タイ語の場合

タイ語の状況範疇は意味的に、CE が示す事象がどんなありさま、どんな状態で行われるのかを示す場合と、CE が示す事象がどんな条件で起こるのかを示す場合がある*⁶。

(32) a. kháw fàw tuu mǎwkhâaw

彼 守って 見る ごはんのなべ

彼はじっとお鍋を見る。

b. kháw khayet thaaw dwn

彼 立てる 爪先 歩く

彼は爪先を立てて歩く。

c. kháw cháw mǐit hàn ná

彼 用いる ナイフ 切る 肉

彼はナイフで肉を切る。

(32a) の fàw は 2 項動詞であるが、目的語をとっておらず、お鍋を見るという事象の様態を示している。また、(32b) の khayet は 2 項動詞であり、目的語をとって、歩く行為の様態を示している。しかし、cháw は 2 項動詞であるが、様態ではなく切る行為の道具を示しているとは考えられない。すなわち、タイ語の状況範疇は、統語的には様態と条件のように下位分類する根拠が見られない。たとえば、タイ語には中国語のような様態マーカーもなく、様態 DE と条件 DE の位置も同じであるので、統語的に事象のありさまを示す DE と事象の条件を示す DE を区別することができない。

3-4. 条件範疇として振る舞う介詞句

中国語には常に述語に先行し、述語の受益者、場所、共同者などを示す語類がある。それらは英語の前置詞、日本語の後置詞と同じ機能、すなわち述語の「格」を示す機能を持っているので、従来、ほとんどの文法書ではそれを動詞と区別して介詞と呼んでいる。(33) はその具体例である。

(33) a. Tā gěi wǒ qiē ròu.

彼 受益 私 切る 肉

彼はぼくのために肉を切る。

b. Tā zài chùfáng qiē ròu.

彼 場所 台所 切る 肉

彼は台所で肉を切る。

c. Tā gēn Zhāngsān qiē ròu.

彼 共同 人名 切る 肉

彼は張三と肉を切る。

ここに中国語の介詞類はといった動詞であるのかそれとも前置詞であるのかという問題がある。もし介詞が前置詞であれば、それを含む構文は英語や日本語の前（後）置詞を含む構文と同じで動詞連続構文ではないと言える。もし介詞が動詞であれば、それを含む構文は動詞連続構文であり、介詞句も CE が生起する条件を示す条件範疇である。なぜなら、受益者、場所、共同者などの意味役割は実は CE が生起する条件の一種として説明することができるからである。

本論文では、中国語の介詞句は英語の前置詞句や日本語の後置詞句とは異なり、条件範疇として働く動詞句であり、介詞句を含む構文は動詞連続構文であるということを主張したい。周知のように、動詞と前（後）置詞との大きな違いは、動詞は外項をとるが、前置詞は外項をとらないということである。本論文のこの主張が妥当であることは、中国語の介詞は外項をとるが、英語の前置詞や日本語の後置詞は外項をとらないという事実によって裏付けられる。次の名詞句構造を見られたい。

(34) 前置詞句 + N

a. a visiting scholar [from Japan]

b.*a visiting scholar [who from Japan]

(35) 後置詞句 + N

a. [日本で] の日々

b.*[僕が日本で] の日々

(34) と (35) をみればわかるように、前置詞にしる後置詞にしる外項をとらないため、関係節を作ることができない。それに対して、動詞句は外項をとるので、関係節を作ることができる。

(36) 動詞句 + N

a. a visiting scholar [who came from Japan]

b. [僕が日本にいる] 日々

(34) の前置詞句と (35) の後置詞句では主語の生起が許されないのに対し、(36) の動詞句では、主語の生起が許される。

一方、中国語の介詞句 + N の場合、その介詞句内には主語が含まれうることが観察される。まず、(37) のような「NP + 介詞句 + N」の連続を見られたい。

(37) a. [wǒ zài Rìběn] de gōngzuò

私 場所 日本 の 仕事

僕の日本での仕事

b. [wǒ gēn Tàiláng] de zhēngchǎo

私 共同 太郎 の 言い争い

僕の太郎との言い争い

c. [wǒ duì Tàiláng] de yìjiàn

私 対する 太郎 の 不満

僕の太郎に対する不満

では、(37) の各々の wǒ (私) は[]で示されているように動詞句内の主語として見るべきなのか、それとも 日本語訳のように gōngzuò (仕事) の所有者として見るべきなのか。この質問に答えるまえに、まず、中国語では、所有者 + NP の間に de (の) が挿入できるのに対して、関係節内の「主語 + 動詞句」の間に de が挿入できないという事実を示したい。

(38) a. wǒ nàge shūbāo

私 その かばん

ぼくの鞆。

b. wǒ de nàge shūbāo

同上。

(39) a. [wǒ zuótiān kǎo] de yú

私 きのう 焼く の 魚

僕がきのう焼いた魚

b.*[wǒ de zuótiān kǎo] de yú

同上。

(38a) の wǒ と nàge shūbāo の間に、(38b) のように de が挿入できる。なぜなら、wǒ が nàge shūbāo の所有者だからである。それに対して、(39a) の wǒ zuótiān kǎo は関係節であり、その中の wǒ は主語である。したがって、wǒ と zuótiān kǎo の間に de が挿入できない。ところが、「NP + 介詞句」の間にも de が挿入できない。

(37') a.*wǒ de zài Rìběn de gōngzuò

私 の 場所 日本 の 仕事

僕の日本での仕事

b.*wǒ de gēn Tàiláng de zhēngchǎo

私 の 共同 太郎 の 喧嘩

僕の太郎との喧嘩

c.*wǒ de duì tài láng de yìjiàn

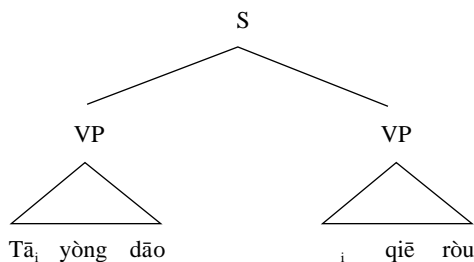
私 の 対象 太郎 の 不満

僕の太郎に対する不満

wǒ に de が後続している(37')の各文がそれぞれ非文法的であることから、その wǒ が所有者 NP ではなく、関係節の主語であると言える*7。

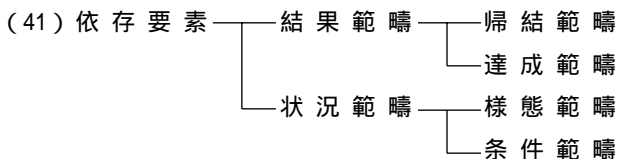
以上の観察から、中国語の介詞句は動詞句であり、動詞連続構文では条件範疇として振る舞っていると言える。その構造は(40)である。

(40)

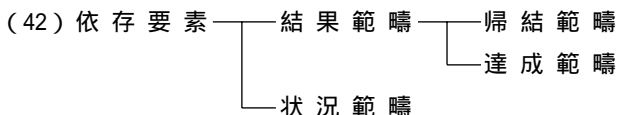


3-4. 動詞連続構文における4つの文法範疇

以上見てきたように、動詞連続構文の依存要素には(41)に示すように、少なくとも4つの文法範疇がある。



中国語の動詞連続構文における文法範疇はまさに(41)のようなシステムになっているが、タイ語の動詞連続構文における文法範疇は(42)のようになっている。



すなわち、タイ語の状況範疇には下位範疇がないということである。

4. 方向動詞の機能

中国語とタイ語には「移動動詞 + 方向動詞」という組み合わせがある。確かに両言語の方向動詞は移動動詞に後続して移動の方向を示しているが、移動動詞に後続する方向動詞は統語的に方向範疇をなしているかどうかという問題がある*8。

この節では、ある特殊な機能的意味を担っている独特の形式が文法範疇で

あるという定義に基づいて、方向動詞の動詞連続構文での機能を考察する。もし方向という機能的意味を担っている方向動詞は独特な振る舞いをしているならば、方向範疇をなしているとみなすことができるが、逆に、それは独特な振る舞いをせず、ほかの文法範疇と同じ特徴を持っているなら、方向範疇をなしているとは言えない。

4-1. CE としての方向動詞

この節では、「移動動詞 + 方向動詞」の組み合わせでは、方向動詞が CE として働いていることを考察する。まず、中国語の方向動詞とタイ語の方向動詞の構文には次のような対立が見られる。

(43) a. タイ語 : kháw wîŋ maa roonrian.

彼 走る 来る 学校

彼は走って学校に来る。

b. 中国語 : *Tā pǎo lái xuéxiào.

彼 走る 来る 学校

彼は走って学校に来る。

同じ「移動動詞 + 方向動詞」の組み合わせでも、(43a) のタイ語は文法的であるが、(43b) の中国語は非文法的である。もし移動動詞に後続している方向動詞が方向範疇をなしていると分析すれば、中国語の方向範疇とタイ語の方向範疇がうえのような対立をするのはなぜかという問題があるのであろう。

この節では、移動動詞に後続している方向動詞は一般動詞と同じように CE として振る舞い、先行移動動詞はまた様態 DE として機能していると指摘する。この指摘によれば、(43) の対立は実は CE としての方向動詞と関係なく、両言語における様態 DE の特徴が異なることによって引き起こされたものであると説明することができる。3-3節で見たように、タイ語では様態 DE には特殊なマーカーがなく、条件 DE と同じ形式であるが、中国語の様態 DE には様態マーカー -zhe が後続するという意味で、条件 DE と異なる形式をとっている。したがって、(43a) のタイ語が文法的であり、(43b) の中国語が非文法的であるのは様態 DE が裸の動詞だからである。この説明が

妥当であることは、中国語の様態 DE に様態マーカー -zhe をつけば、(43b) が (44) のように文法的になることによって裏づけられる。

(44) Tā pǎo - zhe lái xuéxiào.

彼 走る 様態マーカー 来る 学校

彼は走って学校に来る。

(43b) は実は様態 DE + CE の構文であるという説明の妥当性を支持するもう1つの現象は、様態マーカーが持続性を持つ移動動詞にだけ後続することができるということである。

3-3-1節で見たように、中国語の動詞は持続性動詞と非持続性動詞に分かれている。そして、持続性動詞だけが様態マーカーと共に起することができる。それと平行して、移動動詞にも持続性移動動詞と非持続性移動動詞がある。持続性移動動詞には pǎo (走る) zǒu (歩く) dài (つれる) などのようなものがあるが、非持続性移動動詞には huí (戻る) jìn (入る) sòng (送る) などのようなものがある。では、「持続性移動動詞 + 方向動詞」と「非持続性移動動詞 + 方向動詞」の例をそれぞれ見てみよう。

(45) a. Tā zǒu -zhe qù xuéxiào.

彼 歩く 様態マーカー 行く 学校

彼は歩いて学校に行く。

b. *Tā huí -zhe qù xuéxiào.

彼 戻る 様態マーカー 行く 学校

彼は戻って学校に行く。

持続性移動動詞が様態 DE を担う (45a) 文が文法的であるのに対して、非持続性移動動詞が様態 DE を担う (45b) 文は非文法的である。この事実は、(43) タイプの文では方向動詞が CE であるが、移動動詞が様態 DE であることを示している。

一方、タイ語では、CE のありさまを示す DE と CE の条件を示す DE は統語的に異なる形式をとっていないので、動詞の持続性に対して敏感ではない。したがって、klàp (戻る) khaw (入る) も wîŋ (走る) と同じように CE のありさまを示すことができる。

(46) a. khăw wîŋ pai rooŋrian léəw

彼 走る 行く 学校 完了

彼は走って学校に行った。

b. kháw klàp bay rooŋrian léəw.

彼 戻る 行く 学校 完了

彼は戻って学校に行った。

(46b) が (46a) と同じように文法的であることから、タイ語の様態範疇は条件範疇から独立しておらず、CE のありさまを示すのに動詞の持続性には敏感ではないということが伺える。wîŋ と klàp の平行性から、両者とも状況範疇として振る舞っていると考えられる。

さて、方向動詞は CE であるが、移動動詞は方向動詞の条件 DE として働く場合を見てみよう。中国語とタイ語の次の平行性を見られたい。

(47) a. 中国語: Tā huí xuéxiào qù.

彼 戻る 学校 行く

彼は学校へ戻っていく。

b. タイ語: kháw klàp rooŋrian bay.

彼 戻る 学校 行く

彼は学校に戻っていく。

(47) では、中国語もタイ語も huí/klàp が裸の動詞であるにもかかわらず、2つの文とも文法的である。この現象について、huí xuéxiào/klàp rooŋrian (学校に戻る) は様態 DE ではなく、条件 DE であると説明することができる。また、ここの qù/bay も方向範疇ではなく、CE であると考えられる。この説明が妥当であると支持する現象は2つ挙げられる。1つは、中国語では先行動詞 (huí) にアスペクトマーカが後続できないということである。

(48) a. Tā huí xuéxiào qù le.

彼 戻る 学校 行く 助詞

彼は学校へ戻っていった。

b. *Tā huí - le xuéxiào qù.

彼 戻る 完了 学校 行く

同上。

(48) に示しているように、le が先行動詞の huí に後続することができない。この事実は、huí xuéxiào が CE ではないことを意味する。したがって、(48a) では CE が方向動詞であると言わざるをえない。

また、この文はほかの条件 DE 文と平行的であることが挙げられる。

(49) a. Tā dào xuéxiào qù.

彼 到る 学校 行く

彼は学校に行く。

b. Tā wàng Běijīng qù.

彼 向かう 北京 行く

彼は北京に向かって行く。

(47) の文の huí/klàp (戻る) は dào (に) wàng (に向かって) の仲間で方向動詞の目標を示していると考えられる。なぜなら、(47a) が (49) の文とともに Tā dào nǎr qù? (彼はどこに行くのか) という質問への返答として可能だからである。さらに、移動の主体を目的語としてとる移動動詞の Vb も同じように方向動詞の条件 DE として働く。

(50) a. Tā dài péngyou lái.

彼 つれる 友達 来る

彼は友達をつれて来る。

b. kháw phaa fēen maa.

彼 つれる 友達 来る

彼は友達をつれて来る。

(50) では lái/maa は dài péngyou/phaa fēen (友達を連れる) の方向ではなく、dài péngyou/phaa fēen は lái/maa の手段・様式である。なぜなら、それらの文は Tā zěme lái? (彼はどのように来るのか) という質問への返答として可能だからである。この文は (51) の非移動動詞の条件 DE の仲間である。

(51) a. Tā qí zìxíngchē lái.

彼 乗る 自転車 来る

彼は自転車に乗って来る。

b. Tā yuē péngyou lái.

彼 誘う 友達 来る

彼は友達を誘って来る。

(51a) の qí zìxíngchē (自転車に乗る) は lái の手段を示し、(51b) の yuē péngyou (友達を誘う) は lái の様式である。いずれも方向動詞が CE で非移動動詞が条件 DE である。

4-2. DE としての方向動詞

この節では、方向動詞が達成範疇として働いたり帰結範疇として働いたりすることを考察する。最後に、方向動詞が達成範疇として働くことができる理由は方向動詞自体が状態変化の意味を持っているということを議論する。

まず、中国語の方向動詞もタイ語の方向動詞も達成範疇として働くことが観察される。中国語とタイ語のつぎの対立文を比較されたい。

(52) a. 中国語: Tā jì lái - le yīfēng xìn.

彼 送る 来る 助詞 一通 手紙

彼は一通の手紙を送ってきた。

b. タイ語: *kháw sǒŋ maa còtmǎay.

彼 送る 来る 手紙

彼は手紙を送ってきた。

(52a) でも (52b) でも方向動詞が Vb の直後に後続しているが、中国語は文法的であるが、タイ語は非文法的である。もしこの方向動詞を方向範疇として分析するなら、中国語の方向範疇とタイ語の方向範疇におけるうえの対立を引き起こす理由は何かという問題がある。

この節では、中国語の方向動詞でもタイ語の方向動詞でも達成範疇の一要素として働くことができると分析したい。この分析に基づけば、(52) の対立は両言語の達成範疇の位置の違いによって引き起こされた自然な結果であると説明できる。具体的には、中国語の達成 DE は「V1-V2 NP」構文の V2 の位置に来るが、タイ語では「V1 NP V2」構文の V2 の位置に来ることは 3-2 節で見たとおりである。この分析が妥当であることは、タイ語の (53) が文法的であることによって裏付けられる。

(53) kháw sòŋ còtmăay maa.

彼 送る 手紙 来る

彼は手紙を送ってきた。

(52b) と (53) はミニマルペアになっている。(52b) が非文法的であるのは、達成範疇の maa が中国語の達成範疇と同じ位置に来たからである。それに対して、(53) が文法的であるのは、達成範疇の maa が移動動詞 + NP の後というタイ語の正しい位置に来ているからであると考えられる。

方向動詞はまた達成範疇としてだけではなく、帰結範疇の一要素として働くことも可能である。中国語にはつぎのような例が見られる*⁹。

(54) Tā jì - le yìběn shū lái.

彼 送る 完了 一冊 本 来る

彼は一冊の本を（郵便で）送ってきた。

この例の lái は主体 yìběn shū の帰結を示している。すなわち、送られた本は話者の近くに移動するという属性を持つということである。この場合の方向動詞が帰結範疇の一要素として働いていると考える理由は2つある。1つ目に、方向動詞は達成範疇の位置ではなく、帰結範疇の位置に来ている。(54) に示しているように、中国語の lái は CE 動詞 + NP の後に来ている。2つ目に、方向動詞は帰結 DE と同じように、主体を持つ NP に後続するが、目標 (Goal) を持つ NP には後続できないということである。(54) の文が文法的であるが、次の (55) の文は非文法的である。その理由は (54) の目的語 NP が主体という意味役割を持っているが、(55) の目的語 NP は目標という意味役割を持っているということである。

(55) *Tā jìn - le jiàoshì lái.

彼 入る 完了 教室 来る

彼は教室に入ってきた。

以上の2つの理由により、(54) の lái は単に帰結範疇の1例にすぎないと言える。

4-3. 方向動詞の2つの性質

3-2節で述べたように、達成範疇として働くことができる動詞と、帰結範疇として働く動詞の性質は異なる。前者は変化動詞であるが、後者は活動動詞である。では、中国語の方向動詞が達成範疇としも帰結範疇としても働くことができるのはなぜだろうか。

中国語の方向動詞もタイ語の方向動詞も2つの性質を併せ持っていると考えられる。1つは活動動詞としての性質であり、もう1つは変化動詞としての性質である。具体的には次の(56)と(57)を見られたい。

(56) 活動動詞としての性質

lai/maa : 主体が話者に向かって移動する。

qu/pay : 主体が話者から遠くへ移動する。

(57) 変化動詞としての性質

lai/maa : 主体が話者の前に現れる。

qu/pay : 主体が話者の前から消える。

(56)の方向動詞の意味はよく知られているが(57)の意味はあまり述べられていない。なぜなら、(57)の方向動詞は常にアスペクトマーカ―として動詞に後続するからである。(57)について次の例を見られたい。

(58) a. chù - qù

消す 去る

消してしまう。

b. xǐng - lái

醒める 来る

醒めてくる。

(58)のqùとláiはそれぞれ移動の過程を示しているとは思えない。(58a)のqùはある主体が消えるという意味であり、(58b)のláiはある主体(意識)が現実の世界に現れるという意味である。

(54)で観察した、帰結範疇として働く方向動詞は(56)タイプであり、(52)で観察した、達成範疇として働く方向動詞は(57)タイプであると説明することができる。まず、達成範疇の位置に来る方向動詞は目標目的語をとってはならない、なぜなら、目標目的語をとる方向動詞は明らかに活動性

を持っているからである。

(59) a. Tā pǎo - lái le.

彼 走る 来る 助詞

彼は走ってきた。

b. *Tā pǎo - lái le xuéxiào.

彼 走る 来る 助詞 学校

彼は学校に走ってきた。

目標目的語をとらない (59a) は文法的であるが、目標目的語をとる (59b) は非文法的である。なぜなら、目標目的語をとらない方向動詞 lái は “ 現れる ” という意味で、変化性を持っているからであり、目標目的語をとる方向動詞は活動動詞だからである。同じ目標目的語をとる動詞でも、方向動詞は dào (到る) と異なる。方向動詞はある目標に向かって移動するという意味で活動動詞であるが、dào はある地点に着くという変化的意味を持っている。したがって、dào (到る) は目標目的語をとっても (60) のように達成 DE の位置に来ることができる。

(60) a. Tā pǎo - dào le.

彼 走る 到る 助詞

彼は走って着いた。

b. Tā pǎo - dào le xuéxiào.

彼 走る 到る 助詞 学校

彼は走って学校に着いた。

タイ語の方向動詞は (42) のように、達成範疇として働くことが見られる。タイ語の方向動詞はさらに、方向性が薄くなり、アスペクトマーカ―として働くことさえもある。

(61) kháw khăay bān kàw pay

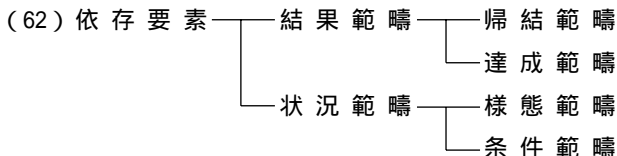
彼 売る 家 古い 行く

彼は古い家を売ってしまう。

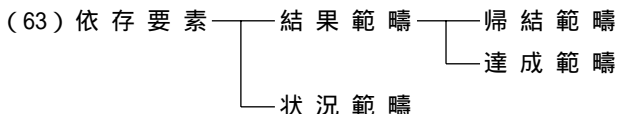
(61) の pay は 「 成し遂げる 」 という意味であるので、アスペクトマーカ―とみなすことができる。

5. 結 論

動詞連続構文にはどんな文法範疇があるのか。この問題は孤立的言語を研究する言語学者の注目している焦点の1つである。この論文は少なくとも中国語には以下のような文法範疇の体系があることを明らかにした。



タイ語では状況範疇が細分化していないので、次の範疇体系が見られる。



また、中国語にもタイ語にも方向動詞があり、それは常に移動動詞に後続して方向表現を作る。この「移動動詞 + 方向動詞」という形式では、方向動詞はコア要素として働いたり、結果範疇として働いたりして、独自の文法形式を作っていない。この理由により、中国語にもタイ語にも方向範疇がないと結論づけられる。

最後に、本論文の第1節で出した(5)の問題を次のように説明することができる。

(5) a. 中国語の方向動詞は(1c)のように Va の直後に後続することができるのに対して、タイ語の方向動詞は(3c)のように Va の直後に後続できるのはなぜか。

b. タイ語の方向動詞は(4c)のように Vb の直後に後続することができるのに対して、中国語の方向動詞は(2c)のように Vb の直後に後続できるのはなぜか。

(5a)の問題のポイントは2つである。1つは、中国語の様態 DE には様態マーカー -zhe がつくが、タイ語にはそのような制約がないということである。もう1つのポイントは、中国語では、様態範疇を担うことができる動詞は持続性を持つ動詞でなければならないのに対してタイ語にはそのような制

限がない(3-3-1 節と 4-1 節を参照されたい)。したがって、中国語の方向動詞が様態 DE としての Va に後続する場合、Va が 2 つの条件を満たさなければならない。1 つは Va が様態マーカ―を後続しなければならない。もう 1 つは Va が持続性を持つものでなければならないということである。(1c) が非文法的であるのは、Va が 2 つの条件をどちらも満たしていないからである。それに対して、(3c) が文法的であるのは、タイ語には以上の 2 つの条件がないからである。

(5b) のポイントについては、中国語の達成 DE の位置とタイ語の達成 DE の位置が異なるということである。中国語の達成 DE は CE 動詞の直後に来るが、タイ語の達成 DE は CE 動詞 + NP の後に来る(3-2 節参照)。したがって、達成 DE として働く(4c) の方向動詞が中国語と違って、(4b) のように CE 動詞 + NP の後に来れば、(4c) は文法的になる。

参考文献

- Carlson, Robert. 1991. "Postpositions and Word Order in Senufo Languages," Elizabeth Closs Traugott and Bernd Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization Vol. II Focus on Types of Grammatical Markers*, 200-221, John Benjamins Publishing Company.
- John Haiman (ed.) 1985. *Iconicity in Syntax*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Kingkarn Thepkanjana. 1986. "Serial Verb Constructions in Thai." Ph. D. thesis: The University of Michigan.
- 刘叔新. 1985. "试论趋向范畴". 中国语文杂志社编『语法研究和探索 3』, 北京大学出版社.
- 刘月华・潘文娒・故犇. 1983. 『实用现代汉语语法』, 外语教学与研究出版社.
- Lord, Carol. 1993. *Historical Change in Serial Verb Constructions*. John Benjamins Publishing Company.
- 沈力. 1993. 「关于汉语结果复合动词中参项结构的问题」『语文研究』3 期, 山西省社会科学院语言研究所.
- Tai, James, H-Y. 1985. "Temporal sequence and Chinese word order." John Haiman (ed.) *Iconicity in Syntax*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Tasaneeth Methaphisit. 1998 "タイ語の動詞連続構文", MS. 東京大学大学院人文社会系研究

科.

*1 本研究は同志社大学学術奨励による基礎的研究である。筆者は大学の学術奨励を利用して多くのタイ語のデータを得ることができ、まことに感謝する次第である。さらに、タイ語調査中、Tasaneeth Methapisit 氏と Suproneeth Thammachot 氏に教えていただくものが多く、ここで感謝の意を表する。

*2 ここでは中国語の事実を挙げることにする。タイ語の DE 形式の特徴については更なる観察が必要である。

*3 この現象は Tasaneeth (1998) で報告されている。

*4 変化性と活動性について拙論 (1993) を参照されたい。

*5 Tasaneeth (1998) には、否定辞が比較を表す V2 (DE に相当) に先行することができるという記述がある。

i. kháw kèng kɛn manút

かれ 優れる 越える 人間

彼は人間より優れている。

ii. kháw kèng mǎy kɛn manút

かれ 優れる NEG 越える 人間

彼は人間ほど優れていない。

本論文ではこの "kɛn manút" は達成 DE の 1 例として分析する。なぜなら、"kɛn" は変化性を持つ動詞であり、且つ比較文では CE に後続しなければならないからである。

*6 Tasaneeth (1998) では、前者は様態関係、後者は道具関係としてまとめられている。

*7 de が挿入できないのは wǒ が主語だからではなく、その近くに de がすでにあるからではないかと思われるかもしれないが、その考え方は妥当ではない。中国語には数は少ないが、前置詞があり、それは guānyù (に関して) のようなものである。そして guānyù に de が後続しているにもかかわらず、NP + guānyù の間にさらに de が挿入できる。

i. wǒ de guānyú dòngcí de yánjiū

私 の について 動詞 の 研究

わたしの動詞に関する研究

この事実から、(37')で de が挿入できないのは、その近くに同じ de があるからではないことがわかる。

*8 中国語とタイ語の動詞連続構文には「方向動詞 + (移動)動詞」という組み合わせもあるが、この場合の方向動詞は明らかに CE であり、方向範疇と考えられない現象であるので、ここではそれらの考察を割愛させていただきたい。

*9 タイ語の方向動詞が帰結範疇として振る舞う特徴は観察されていない。

概 要

沈 力

本論文主要论述连动句在孤立性语言中所起的语法作用。笔者在调查中发现汉语依存关系的连动句中有2个大的语法范畴。一个是状况范畴，一个是结果范畴。这两个语法范畴又分别有两个下位范畴。状况范畴中包括条件范畴和样态范畴。条件范畴表示事件发生的条件，它经常起着形态复杂语言中斜格的作用；样态范畴表示某事件在发生时的样子。另外，结果范畴中包括达成范畴和归属范畴。达成范畴的作用是表示某事件发生后所得到的预期效果；而归属范畴则表示某事件发生后主体 (theme) 的归结。而泰语的连动句里的状况范畴并没有分裂成两个下属范畴。因此在泰语依存关系的连动句中只有3个语法范畴。

在以前的研究中，移动动词后续方向动词的现象被看成是句法上的方向范畴，笔者认为这种看法不妥。因为方向动词在连动句中不是做核心谓语，就是做结果范畴；它并没有独自的语法特征。

Grammatical Categories in the Serial Verb Constructions in Chinese and Thai
Is Directional an Independent Category in these Two Languages?

Li SHEN

Key words: Grammatical Category, Serial Verb Construction, Temporal Sequence,
Core Element, Dependent Element, Directional Verb